

世界とつな



函館ペリーボート競漕実行委員会
柏木 功 様

1回目の大会から担当していますよ。函館にペリーがやってきたのは、開港前の安政元（1854）年。アメリカ艦隊が錨を下ろすと8人の男にオールで漕がれた小舟が近づいてきたとの出来事を回顧して、市民みんなで楽しんでいます。これからも多くの方に港の魅力を発信していきます。



函館開発建設部函館港湾事務所
所長 伊藤 千尋 様

昨年11月から工事を始め、この10月から4万t級までのクルーズ船の接岸が可能になりました。完成すると水深10m、長さ360mになり、11万t級の大型クルーズ船が接岸可能になります。JR函館駅からわずか300mに位置し、人気の朝市や周辺観光スポットにとっても近く、インバウンド観光やクルーズ船の誘致に大きく貢献すると考えます。函館港をととして北海道がますます世界との結びつきを深めていくことを期待しています。

がる函館港



1チーム8人、3隻ずつでタイムを競うペリー
ボート競漕。後ろは函館市青函連絡船記念館摩周丸

表紙：函館港若松地区クルーズ船岸壁整備事業

150 t 吊りの起重機船による岸壁上部の鉄筋組み立て、
コンクリート打ち込み 2018年7月29日撮影

目次：10月1日から暫定供用を開始したクルーズ船岸壁

全長360mのうち手前50mのドルフィン（脚柱の上に係
留施設を備えたもの）を含む225mの岸壁が供用を開始
2018年10月2日撮影

裏表紙：旧棧橋（東浜棧橋）近くに立つ「赤い靴」のモデルとさ
れるきみちゃんの像。きみちゃんは明治36（1903）年、
お母さんとともに静岡県から函館へと移り住んだ。その
後、母親は寿都村の農場に入植したが、病弱だったきみ
ちゃんはアメリカ人宣教師に預けられ、函館が母子の別
れの地になったといわれている

函館港は、安政6（1859）年、横浜・長崎とともにわが国初の
貿易港として開港。明治12（1879）年に着手された港湾調査以降、
近代港湾としての建設が積極的に進められてきました。

昭和26（1951）年、重要港湾に指定されて着実に施設の拡張整
備が進み、現在、国際観光交流空間、北海道と本州を結ぶ物流拠
点など、大きな役割を担っています。

さて、7月29日には、開港159周年を記念した第10回函館ペリー
ボート競漕が若松ふ頭で開催されました。約400名の参加者の熱
気に空も劇的に晴れ渡り、表彰式には全員真っ赤に日焼けし歓声
がはじけました。

これまでこれからも世界とつながる函館港。若松地区クルー
ズ船岸壁の暫定供用も始まり、ますます注目が集まっています。